

小宮豊隆

「三四郎」を読む

「三四郎」を読む

一

文芸の作品を批評するに当って、其作品から受けた第一印象程重んずべきものなき事は、今更精わしく述べる必要はあるまい。与えられた作品を、初めて翫賞がんしやうする際は、其作品が如何なる材料を、如何に取扱っているかに関して、寸毫すんごうも予知する事が出来ないのであるから、佳よいとか、駄目だとか、好きだの、嫌いだの、前以てそん

なことはすこしも考えては居らん。尤も人あつて、成心^{もつと}を把持^{はじ}して特定の作品に対する場合は、例外になるのであるが、要するに第一印象は、不用意の間に咄嗟^{とつさ}に来る、換言すれば、雑念を容れざる頭脳に映じた印象であるから、最も明瞭に且つ^か、最も澆刺^{はつらつ}たる性質を有している。明瞭に且つ澆刺たるが故に、解剖して行つて説明を与えるに都合よき印象である。

然^{しか}るに、新聞に掲載された小説には、此第一印象と名づけらるべき程の、澆刺たる印象を欠き易^やすいと思う。新聞に掲載された小説の分量は、日に一欄半か一欄位の

ものである。そうして、完結に至る迄には、三ヶ月か四ヶ月もかかる。小説全体から受ける纏った感じは、三、四ヶ月の後でなければ分らない。丁度綺麗な女の顔を、今日、眉毛を一つ、明日、眼を一つ見せられるような気がする。断片的な印象は慥たしかに残っている。しかし断片的な印象を加え合わせたものが小説的だと云えない。其の部分が部分を生み、部分を受けて、有機的に連らなり纏った全体の感じが主であるのに、新聞で、長い時日を、日にすこし宛ずつ読んで行くのでは、印象の色が極めて薄い。一冊に纏った本を、ある纏った時間の連続で、極めて、

読んで得た印象に比して、遙かに薄い。

自分は「三四郎」を朝日新聞で、毎朝読んだ。そうしていつも、頭が「三四郎」と同じ調子になりかける頃になると、丁度区切りがついて、又明日まで待たなければならんのを、いつも遺憾に思っていた。だから此小説が済んだときは、全体纏つての印象を、得るには得たが、其色彩は淡いものであつた。今度「三四郎」を批評する為に、本になつた上で読み返えした。そうして一気に、全体から纏つた感じを得た。其れを土台にして、考え出したら、途中で考えがぐらついて、仕方がないから、再

び改めて読んだ。跡で読んだ二度共、前に新聞で受けた印象が淡き色彩ながらも、一種の暗示の勢力を有して、先きへ立って進んで行くから、此作に於ける創作の知的活動の方面即ち人物の配置だとか、全体の結構だとか云う方面ばかりが眼に付いた。それだから此一篇は、此知的方面の批評に傾むき勝ちになるも知れぬと思う。しかも最初に新聞で読んだときに得た印象も、淡くはあるが、出来る丈けは解剖して行く積りである。

「三四郎」を論ずる際に、先ず第一に極めて置かなければならぬのは、此一篇の小説で、何を、如何に描いてあるかの点である。

「三四郎」は、小川三四郎なる大学生を主人公にして、其の主人公の性格が、ある期間に於て、周囲の空気にかぶれて、段々と変わって来る。其性格の発展をのみ目的として書いたのではない。主人公の性格を叙すると、同じ程度に於て、三四郎が、かぶれた周囲の空気——即ち

三四郎が影響を受ける、色々な友人知己の性格をも精細に描き出したものである。言い換えれば、作者は、三四郎を中心に置いて、三四郎が浮遊している周囲の空気全体に興味を持って此一篇を書いたものである。それだから大きな意味に於て、キャラクター・スケッチの小説である。

自分は西洋の小説をあんまり読んで居らんから、断言することは出来ないが、自分の読んだ範囲に於ては、小説許りではない戯曲でも、一人の主人公、或は二人三人の重なる性格を旨く写し出している以外に、全体に出て

来る人間の性格を、各活きているように、各主人公たり得る資格をもつて、明瞭描写されたのを見たことがない。読んで仕舞つて後とに残っているものは、明らかな輪廓を以て、頭の中に印象をとどめているものは、単に一人か二人に過ぎない。小説又は戯曲の各の全体は、其の中に出て来る重なる人物の一、二を活かすために、凡てを犠牲に供しているかの観がある。ダヌンチオの「死の勝利」を例にとると、ジョルジオと云う妙な気狂じみた男の気持ちや、性格を充分に明らかにする為めに、イポリツタだの、ジョルジオの親爺やら、死んだ伯父さんやら、

母やら、弟やら、其他色々、つまり、あの小説の中に出て来る全体の景色や人物が、ジョルジオ一人を活かさんが為めに、（生きているか、いないかは、此処では別問題である）それぞれに働いている。ズーデルマンの「カツツエン・シュテツヒ」でも其通りである。レギーネと云う妙な女を、或は、レギーネとボレスラフとの二人を、明らかに活躍させる為めに、他のあらゆる人物を道具に使っている。イブセンでも、ツルゲーニエフでも、大抵は主人公を写す為に、他の人物を踏台に使っているのである。尤もみんな是れ等の作者は、其計画に於て、初め

から、主人公を写つす積だったから、其作品に他の副人物が、主人公の犠牲になつてゐるのは、毫も貶するに足りない。同時に「三四郎」と比較することは出来ないと言ふ人があるかも知れない。然かし、篇中に出て来る多勢いの人間を、同じ程度の明瞭さで寫つすのと、ある特定の、二の人間を明瞭に描くが為めに、他を犠牲にするのとはどつちがむずかしいかと言へば、描かるべき性格の種類にもよる事だろうが、大抵似寄つたものを書くとすれば、別に考えんでも分り切つてゐる。今迄の作品のやり方は丁度、自分丈け立派な装をして、穢きたい下女か

なんかを連れてあるく奥様のようなものだと思ふ。それが悪いと云うのではない。それが一種の方法をとらずに、今迄人が嘗て成功しなかつた多勢の性格を等分に描がき上げてあると云う点を、大なる特色だと云うのである。

ドイツにビルドゥングス・ロマンと名づけられている小説の一種がある。ゲーテの「ヴィルヘルム・マイステル」だとか、ノヴァリスの「ハイน์リッヒ・フォン・オフテルディングン」だとか、ケラーの「デル・グリューネ・ハイน์リッヒ」だとか此種の小説に属している。是れ等の小説は、大變な長い月日の間に行われる主人公

の性格の開発を目的として書いている。長い間に色ろんな人に交って、色ろんな影響を受けて、人間が出来上がって行く処を書いている。だから影響を受ける当人の性格の発展が主眼なのであるが、それだけ一方では、影響を与える他の人々の性情が明瞭でなければならん訳だから、出て来る人物——主人公と接触する人物は、それだけ重く見て、明瞭に写つさなければならん。長い時間の間に、色々な人物が相応の価値を持って出るんだから、外の小説に比して、先ず多勢の人間が、多勢ながらに明らかに写つし出さるべき筈である。然かるに大抵は中の

人間が生きていない。揃ろいも揃ろって形を供えていない。あの箇所に行くとき、叙情詩的の感じはある。感じはあるが依然として形を供えていない。又時には形を供えて人間が活躍しているところもあるが、其形は僅かなる二、三人に止まって、しかも全体の上から見て小説全体が極めて纏っていない。全体が纏っていないのだから、何処で切ったところで、差し障わりはない。むしろ一部分一部分を、一箇の短篇小説かなその様に取り扱って見た方が適當である。

一方では、フローベルの「サランボー」の様な小説が

あつて、人間が続々と出て来る歴史小説もある。しかしこんな小説は人間を主として書いたのではなくて、人間を中心として、其の背景を形造つてゐる時代の大パノラマを描いたものであるから、時代から出て来る空氣の色合は感得することは出来るが、人間はちつとも活躍しない。

要するに今迄の小説は多くは、ある特定の一、二を主人公として書いてゐるか、或は多勢の人間を出しいても、其人間が生きていないか、或は多勢の人間を活かそうとしたがために、全体のしめくくりが付かなくなつて、支

離滅裂な作になっているか、何れかに帰着しているように思う。

「三四郎」の中には、三四郎を中心として外に、六人の人間が出て来る。此七人が同様な明瞭さを以て、何ずれも主人公たり得べき資格を以て、活躍するようになって来る。そうして其の七人の活躍が、全局から見て、全体の纏りをつける上に、一挙一動、相関連して、ぬきさしかならぬように出来上がっている。全体が有機的統一を有している。此点に於て、「三四郎」は最も困難なる方法を採用して、しかも成功したものである。此点に於て「三

四郎」は新たらしい。

此困難なる方法を採つて、あれだけに書き上げるに、作者は如何なる手段を講じているかに就いて、研究する必要がある。

三

「三四郎」は十三のチャプターから成立っている。そうして中の人物が、同じ位の度数で、屢々出て来る。入れ交わりして、互違いに重なって行っている。人間が活き

ている活きていないか、作者の、作中の人物に形を与え得ないの才能によって定まる問題であるが、一方では、ある点まで読者にファミリアーになる程度によって、活きる活きないの程度が比例するとも云えるからして、ファミリアーになる為めには、それだけ、作中に幾度も出て来なければならぬ訳である。「三四郎」の中の人物は、悉く幾度も幾度も出て来るのだから、従って読者にファミリアーになり易いのであるけれども単に幾度も読者の眼の前に現らわれるからと云った処で、そんな器械的手段が重なった許りでは、全体の上で、ちっとも

統一が付かない事になって仕舞う。小説全体が有機的全体である為めには、其各の人物が、読者の眼の前に現らわれて来る為めには、それ相応な必然性がなければならん。各の人物が、各行動する為めには、其各の自由意志に由って、ある理由、ある根拠の下に行動しなければ、連鎖を失って支離滅裂な形になって仕舞うのである。「三四郎」の中に出て来る人物は、相当な根拠を持って、各の自由意志の下に、それぞれ動いている。そうして幾度も舞台にあらわれて来る。これが、七人が七人悉く主人公たり得べき明瞭さを以て、活きていると云う結果を持

ち来たすのである。

けれども各の人物が、各の自由意志の下に働らくとすれば、其の各の人物に共通な興味の中心点がなければ、ある程度を越えると、それから先きはバラバラに離れて仕舞わなければならん。茲処に小説中軸論が起こる。

小説の中軸と云ったのは小説全体を貫らぬいて、興味を統一するものの謂いである。ドイツでルドヴィツヒと云う作家が、脊髄骨と云う字を使っている。幾本も幾本もある肋骨が、脊椎一本でつながっているから、こう云う名をつけたのであろう。名前はどうでも好いとして、

全体の興味を一纏めにする為めには、中軸となるべきものが必要である。中軸には人間でも、場所でも、時でも其他色々なものが、なり得ると思う。一人称の小説の如きものは、「我」と云うものが中軸になっている。同時に時と場所がまた中軸になっている。昔の騎士小説、冒険譚など杯は、騎士や冒険者が中軸になっている。岩見重太郎武勇伝には、岩見重太郎が中軸になっている。

しかし考えて見ると、此中軸となっているものが、単なる器械的な中軸として存在しているものがある。昔の冒険譚などは、此器械的な中軸を使用しているのが多い。

前に云った「ヴェイルヘルム・マイステル」でも、「グリ
ユーネ・ハインリツヒ」でも中軸は亦、悉く器械的であ
る。団子の串か、数珠の紐のようなもので、単に全体を
貫らぬいと云うに止まって、それ以上に何等の効
能をも務めて居ない。唯読者の観る立場が極まつただけ
の話しで（これ丈でも、漠然たるものよりも、多少纏ま
った形になってはいるけれど）興味は依然としてバラバ
ラに散らばっている。これは前にも云った如く、中軸に
なっているものと、中軸以外の人物や、事件などとの間
に、或は、人物の行動や、事件の進行やらが、しっくり

食つ付き合つて、有機的に統一されていないからである。だから、一つの作品が纏まる為めには、中軸が必要であつて、しかも其中軸が、其作品中に現われる諸種の人物、事件を有機的に統一する底のものでなければならぬのである。

かくの如くにして初めて、其作品は纏まる。

「三四郎」に於ては、三四郎が中軸になっている。同時に、三四郎と美禰子との関係が中軸になっている。三四郎が中軸になっているから、読者は、此一篇に対する時は三四郎の眼から、凡ての人間、凡ての出来事を見るよ

うな立場に置かれる。茲処で読者の態度が、ある種類の限定を受けるのである。茲処で態度は極まるには、極まったが、興味の方向は、まだ極まらない。そうこうしているうちに、美禰子が出て来て、三四郎は美禰子に興味を有するようになる。美禰子の一挙一動に従って、三四郎が色々に動くようになる。茲処まで来ると読者の興味は、二人の關係がどうなつて行くかと云う点に集注せられる。そうして興味の中心が此一点に置かれるのである。篇中の諸種の人物が、各自由なる意志を有して、勝手に働らくとしても、此中軸となるべき興味ある事件——美

禰子と三四郎との関係——に関連し影響しなかつたならば、いつまでも纏りが付かなくなるだらうと思う。「三四郎」中の諸人物は、此中軸となつた事件を廻ぐつて自由に活動しているから、全体が離れずに、ちゃんと纏つて行っている。「三四郎」では、中軸として、美禰子と三四郎との関係を用いてあるが、同時に他に、与次郎が広田先生を大学教授にしようとする運動が傍軸として用いてある。此傍軸を廻ぐつて、与次郎や、三四郎や、広田先生や野々宮や、原口などの別趣な活動を惹き起こすようになっている。是れは今迄の中軸では見る事の出来

ない性格の他のサイドを描がき出だす手段として大変好い方法であるが、一方から云えば、此傍軸の用い方は非常にむずかしい仕事で同時に、きわどい仕掛だと思う。全体の統一の上に稍ややもすれば混雑を来たし易すき処があるからである。傍軸にしても、中軸にある一種の關係（何れの方面からでも）を有し得る。傍軸ならば、別に全体の統一を破壊することはないけれども、全然關係のない傍軸を持って来るときには、そうして其傍軸が嚴肅になつて来れば、なつて来る程、統一を破ぶる危険の度が加わるからである。興味の中心が二つになつて、パラレル

になるからである。二夕所の談話を一時に聴くようなものだからである。

ゲーテは古い作家で、技巧の方面では頗ぶる拙であるから、茲処に出して来て論ずるのは、気の毒であるが、丁度此の軸を二つ使つて失敗している適例になるから述べる。あの人の書いたものの中に「ブールフェルヴント シャフテン」(「親和力」とか訳していた人があつたと記憶する)と云う小説がある。エツアルドと云う男が、妻君の姪かなんかに当るオツテリエと云う女に段々恋着して行く処と、其妻君が所天おつとのお友達おつとの何んとか云う男

に段々惚れるようになる処を書いてある。此小説では明らかに、興味の中心が二分されている。一方を影に置いて、一方を日向に出して叙述するのなら、此場合では、一方の事件が他の事件を煽動するボツシビリテイーがあり得るんだから、纏まって一つの興味にならぬとも限らぬが、二つの事件を二つながら、外面に出して、パラレルに写つして行こうとしたのだから、読んでちつとも気が乗りがしない、作為の跡を感ずること夥しいものであった。ゲートは其処に気が付いたのか、或は外の理由でだか、どっちか知らぬが、お仕舞の方に来ると、エヅアル

ドとオツテイリエだけの関係一つを叙するに留めてい
る。

かくの如く、全体から云つて、中軸にある程度の連絡
を有している傍軸でも、それが太くなつて、正面から写
される事になると、注意を二分して全体をぶち壊すも
のである。「三四郎」の傍軸——与次郎の教授運動は、
可成な太さで、又正面から写つし出されている。それで
全体の統一を破ぶつていかと云うに破ぶつていない。
此点がまだ注意すべき点である。

丸で中軸に關係がない傍軸で、しかも其傍軸が、ある

程度の大きさを正面から写されているにも係わらず、全体の邪魔にならないのは不思議である。自分は是れを或程度まで説明することが出来ると思う。

与次郎の性格は極めて陽気に出来ている。そうして、いつも澆刺として躍っているかの観がある。与次郎は万事を丸呑みにしたような気で、何事にも当っている。そうしてふわふわしている、だから当人は極めて真面目に行動しているにも係わらず、傍で見ている人は滑稽に感ずる。其真面目が愈真面目であるに従って、愈滑稽に感ずるのである。与次郎自身の言う処によると、広田先生

を一人で養い一人で慰めているように云っている。聞いている人は何んだか可笑しい。それから天下を一人で切つて廻わすようなことを真面目に云っている。又そう真面目に信じているらしい。それを聴くと、何んだか可笑しくなる。広田先生を大学教授にしようと言ふことも、動機は正だしくても、要するに与次郎のイリユージョンである。読者は与次郎のイリユージョンであることを感ずるが故に、与次郎が其上で東奔西走していても、ちつとも厳肅な気持を起こさない。霞を隔てて物を観る気でも其動き方を観察している。新聞に悪る口が出た段になつ

て、此事件が嚴肅シリアスになりかけて来た。若し此記事を読んだら、廣田先生が、普通の人間であつて、普通な考え方をしていたら、大に怒る筈である。そうして与次郎を捕かまえて大に八釜敷云う筈である。或は三四郎にぶんぶん当り散らす筈である。然かるに廣田先生は脱俗の人であつた。与次郎は気が移り易い、だから此場合には、滑稽の感は起らぬが、嚴肅シリアスの度が高まらないで、済んでゐる。だからして、此傍軸は、問題それ自身は重要な問題であるにもかかわらず、又其問題を提出した者の動機は極めて真面目であるにもかかわらず、其問題を取扱う人の

性格と、其問題から生じた波瀾を解決する人の性格とによつて、中軸を害する程の太さにならず、全体の統一を破ぶらずに済んでいる。そうして前に述べたような役目をしているのである。

四

「三四郎」は其中軸となつている、三四郎と美禰子との関係の初まるに始まつて、絶えるに至つて終つてゐる。女を初めて、大学の池の端で見るに初まつて、其女を描

いた絵を丹青会で見ると終っている。男と女との関係は、女がお嫁に行ったに於て終わるものではない。器械的な最後であるかも知れぬが、死が必ずしも終結でないと同じく、精神的に、或は芸術的に終結を告げているとは、決して云う事は出来ないのである。女がお嫁に行けば、男はもう女に会う機会がないかも知れぬ。会う機会がなければ今迄通りの関係の半ばは絶えたことになる。しかし女が男の頭を支配している間は、猶関係が続いているのである。男が女に金を返えしたら、もう物質的な関係はなくなつた。そうして女はお嫁に行く。しかし三四郎

の頭の中には猶女が謎として残っている。女が自分に惚れていたんだか、或は自分を愚弄していたんだか、其辺の処はちつとも分らないで苦しんでいる。此苦しみの除れた時が、女との関係の絶えた時である。苦しみの除れるのは、女を余所から見得た時である。「ひとあし一步傍へ退く事」を敢えてし得た時である。余所から見得ない間は、依然として、美禰子に苦しんでいるのである。囚とらわれているのである。関係が結末に達したのではない。

丹青会展覧会で、「森の女」の絵の前に立って、三四郎が「ストレイ・シープ」を繰返えす処で、三四郎が美

禰子を「一步傍へ退」いて見得たと云う事実が現われて
いるのだが、此の事実の現われ方に就いて、自分は猶す
こしく物足りないような気がする。其理由はこうである。

三四郎は内気な性質として描き出されている。女親の
手に育ったことになっている。頭が複雑に進んでいる割
合に、すべてに対して小供らしく、パツシーヴな人間に
なっている。そうして女に対して或る恐れを有して望ま
なければならん因果を有している。三四郎の頭の中は、
名古屋の宿屋で受けた、女は恐ろしいと云う強い印象に、
常に支配されている。生れ付き女らしいパツシーヴな性

質と、女から得た強い第一印象は、常に彼れの行動を、ある程度に束縛して、ある点まで進んだつきり、一步も外に出ることを許るさない。行く処まで行つて見ることの出来ぬ人間である。そんな人間が、必要に迫まれたからだと云つて、美禰子を、訪ね里見へ行くのは、よくせきの事である。東京に出て来て、色々な人と交際して、余つ程自由な人間になつてゐるとは云いながら、それだけ、美禰子に対して、強いアツトラクションを感じていなければ出来ないことである。美禰子のうちに訪ねて行つたのは、必要に迫まれたからだとしても、次いで、

原口さんのうちに美禰子に会いに行くのは、自分独りで考えて、自分の意志で決行したことなのだから、余程の決心（三四郎に取っては）が必要だったろうと思う。原口さんのうちに行ったのは自由意志でやったにはやったが、唯与次郎から、美禰子が毎日絵にかかれに行く^{ほぞ}と聞いて、丁度いい機会だからと思つて、別に決心の臍を固める程の事もなく行つたとしてもいい。其次に、原口さんのうちで一時間程待つて一所に帰る時、「あなたに会いに行つたんです」とか、「ただ、あなたに会ひたいから行つたんです」とか切つて出たのは、三四郎に取つて

は、思い切った飛躍である。在来の三四郎が、茲処まで突き進すんだのは、丁度、外の男が（三四郎のような性質でなく、三四郎のような一種の因果を持っていない男）女の手を握って、地に脆づき、天を仰いで、切実なる恋を打ち明ける位な猛烈さがあると思う。三四郎の此場合に於ける言動は、外に現らわれている部分よりも、内に含まれて、ポテンシャル・エナジーとして存している内部の動揺の方が劇げしいんだと思う。——是れは、在来の三四郎の性質と行動とを、此場合の行動に比較して得た推察である。そうしてかく推察する事は、此場合此

のシーンに於ける二人の言動を翫賞する上に、多大な興味を与えるものだと考える。

かく迄心を動かしたと推察せらるるにも係わらず、愈美禰子がお嫁さんになるんだと、よし子の口からや、又美禰子自身の口から聴いて、それで後、何等かの変化が三四郎の性格の上に及ばないのは、或はある種類の苦悶がないのは、物足りないと思われるのである。普通の小説家が、普通の苦悶をかくような、そんなものを希望するのではない。唯美禰子に金を返えして、眼に見える縁が二人の間に切れたあと、丹青会で「森の女」の絵の前

でストレー・シープと断ずる前、女が残こした謎を、あ
る点まで解き得るようになる道筋を、一章で好いから設
けて、書いて貰らいたいと思つたのである。

著者は、三四郎が美禰子と分れて下宿に帰ると、国の
母から電報が来ていて、何日かえるか聞いて来たと言
ふ処で叙述の筆をとめている。そうして、三四郎が東京に
居らぬ間の、消息を省ぶいて、又三四郎が東京に来て丹
青画会に「森の女」を見に行く処を写つして居る。三四
郎の心中に色々と起つた筈の消息は、作の裏面に、読者
の想像に任かせてある。此読者の想像に任せると云う

ことは一方では、全体の感じを一層強めて、余韻嫋々たる処がありはするが他方では、多少漠然として、方向が極まらず統一を失いはせぬかと思う、此方向を極めるために、最後に、三四郎の女に対する断定があるんだと見れば見られるのだが、最後のカタストローフから、此断定までは、すこし距離が遠すぎるやの感がある。此二つの点の間に、もう一つ、両方を繋ぎ合わせるものが、あったら、よかったらうにと思われる。広田先生の処に訪ねて行ってもいい、与次郎と話をしてもいい、よし子に会ってもいい。何んでもかまわないから、カタストロー

フ後の三四郎の心の内の動き方に就いて、ある暗示を与えるような一章が欲しかった。

若し三四郎が、原口さんのうちから、回り途中で、あすこまで突き込んだ活躍をせずに、在来の一皮隔てて物を見てるようなぼんやりした関係に比例して、淡き動き様をしていたら、三四郎の動き方は、女の動き方に連れて動ごく、殆んど意志の自由を欠きたる（程度の問題である）受動的の動き方なのだから、動かせる動力となつてゐる女が動かなくなれば自然と、三四郎の動き方も、ある微弱な余波はあるにしても、すぐ止んだつて差支ない

事になるだろう。そうすると最後のストレー・シープの断定がカタストローフに次いで出て来た処が、キチンと納まりが付くと思う。

けれども、三四郎の、あの場合の動き方は、今迄のよ
うな受動的な動き方ではない。受動的を超えて、自から
猛烈なる動き方をしている。能動的な動き方である。能
動的に働らきかけた上は、相手が動ごき止んだからと云
って、こっちの動き方が自然と直きに収まるものではあ
るまい。それだから、前に云ったような一章があつたら
よくはないかと云うのである。

五

前の章で云った事は、全体が、ずうつとなだらかに行つての上で、結末の付けように就いての愚見である。もう一つ結末のすこし前で、カタストロフに急転する径路にすこし工合が悪くはないかと思われる処がある。三四郎が美禰子と一所に、画えかきのところから、歸つて来る途中で、突然、向うから車に乗って来る若い立派な紳士に会う所がある。美禰子の所おつと天となるべき人に会う所

がある。あすこが余りに突然じゃないかと思う。三四郎には勿論突然の出来事なのである。読者は、三四郎の眼を以て見、三四郎の耳を以て聴き、三四郎の如く感じて、つまりは読者と三四郎とは殆んど合して一となっているのだから、茲処は三四郎に突然であると同時に読者に突然であるのだが、茲の場合の突然さは、読者と三四郎が急に離なれるような気がする。そうして三四郎が驚ろく以外に、読者は何んだか作為の跡を感ずる。自分は読んで茲処まで来て、どうしても、此の場合に所天を見ると云うことが際立って全体の調子を破ぶるような気がし

た。茲処に来るまでは、あらゆる人物の行動が盡く必然的の動ごき方をしている。必然的な動き方でなくとも、ある準備があつて、準備の後に、動いているのだから、必然的の動き方と、殆んど同程度の動き方をしていた。だから偶然に二人か三人か会つたにした処で、それぞれ、ある理由の下に動いた上で落ち合つたのだから、決して不思議に思わなかつた。突然なことがあつても、突然だと一寸驚ろく許りで、別に何んとも思うに至らなかつた。然かるに、美禰子の所天たるべき人に、三四郎が会う所に至つて、突然さが、普通のあり得べき突然さよりも、

より以上に突然らしく思えたのである。所天たるべき紳士に会ったのが突然だと云うよりも、美禰子の所天たるべき人が居ると云う事実が突然なのである。

原口さんの宅で、女と原口さんが話をするうち、女が「でも兄は近々結婚致しますよ」「おや、そうですか。すると貴方は何^どうなります」「存じません」と云う所がある。それから三四郎が帰り途中で、「あなたに会いたいから行つたのです」と云うと、女が微かな溜息を洩らす所がある。それから女が黙った儘小半町も来て、不意に絵の出来ようが早すぎると思やしないかと、木に竹を接

いだよな事を云う所がある。あすこいらを、極わめてデリケートな準備だと観れば、観られるが、準備たるには、あまりにデリケートで、殆んど準備たるの効をなさない。著者も多分は、殊に準備の為に書かれたのであるまい。

此場面から暫らく時日を置いて、次のチャプターで三四郎と与次郎が学校で会う。与次郎が「君、里見の御嬢さんの事を聞いたか」と三四郎に云うと、三四郎が「何を」と問い返す。すると人が来て与次郎に用があるの
で、話が断れた。こんな場面を、三四郎が美禰子の所天

に会う前に、一、二箇所入れて置いて貰いたかった。そうすれば、美禰子に就いて、何事かが起りつつある事を、三四郎なり、次いでは読者なりが予察するからして、若い紳士に突然会っても、前以て準備が出来ているから、唐突は唐突であつても、作為的の感が除れやしなかつたらうかと思う。

初め自分が、新聞で読んだ時、若い、立派な紳士が車を馳せて来る叙述を読む瞬間には、美禰子の兄さんだろうと思つていた。兄さんが何処かへ一所に行く積りか何んかで迎いに来たんだなと思つていた。すると仕舞にな

つたら紳士が「早く行こう、兄さんも待っている」と云ったから、すく 尠なからず驚ろいた。そうして、何だか妙な気がした。若しあの紳士が兄さんだったら、いいだろうにと今も思っている。そうして誰とかさんも待っているから、早く行こうと、美禰子の所天になるべき人の名前を云うことにしたら、よかつたろうにと思っている。其次ぎに、学校で与次郎と、例の断片的な話があった後に、何処かで男に会ったら、よかつたろうと思っている。——要するに、お婿さんの出方が、すこし早いような気がする。

美禰子の所天が出て来る来ないは、それ自身に取っては、そんなに大きな問題ではない。しかし、美禰子と三四郎との関係を中軸としている此小説に於ては、これがカタストロフの導火線になるのだからして、テヒニイの上では、尤も重大なる任務を帯びて居る。此中軸となつてゐる事件が、続くか、止むか、従つて小説がつづくか、止むかの問題を惹起す出来事である、其出来事が読者に（少なくとも自分に）無理だと感ぜられるならば、折角今迄キチリキチリと、ぬき差しのならぬような人物の出方と、必然的に因果関係をもつた人物の動き方とに、

抵触する処がありはしないかと考えられるのである。

六

「三四郎」一篇は、前節に云った点を除いて、實際ぬきさしのならぬ小説である。美禰子の所天が出て来る処でも、単なるぬきさしの点から見れば、ぬきさしのならぬ出し方である。しかも其ぬきさしが碁盤の目を盛るように、或は石垣を積み重ねるような、器械的なものではない。篇中の人物が各其意志の支配の下に、因果関係を以

て動きつつある。其重要な部分を抽き抜いて、描き上げたものが「三四郎」である。ある人物のある言葉や、ある挙動は、必ず、その人か、或はそれを聞く人の、後の挙動又は言葉に關係を持って活動する。しかも其言葉、其挙動が、外から喰つ付けたんでなくって、内から働らき出ている。これが各の意志の支配の下に、因果關係を以て動ごいていと云うのである。それだからして「三四郎」の十三章四百二十頁のうちには、茲処を取つたらよかろうと云う、余計な部分が一つもない。一と所取ってしまったら、全体に影響を及ぼして、全体がくず

れて仕舞うようになっていゝる。此篇中にあらわれた人物の言語挙動の色々様々なるもののうちから、中心と、中軸とに關係ある部分のみが抽出して書き上げられていゝる。紛然雜然たる混沌の世界相から、秩序ある連絡ある部分がとり出されていゝるんである。ごちやごちやと動いていゝる世界から、余計な分子を除つて仕舞つて、別に新たなる世界を創造したものが「三四郎」である。その創造せられた世界のうちに、浮遊する幾多の人間は、盡く相合して一箇の有機的全体を形造くつていゝるんである。ある意味に於て芸術の最も芸術的なるものである。

現実の世界は、大局から見れば、ある大いなる法則に従って秩序正だしく動いているかも知れぬが、其方法を観察の外に置けば、世相は極めて漠然たる動き方をしてゐる。あるものは整然と動いている。あるものは雑然と動いている。要するに纏つたものもあれば、纏まらないものも多い。此纏らないものを、纏らない儘にかいて、これが人生だと云つてる人がある。それは人生の一部分かも知れない、又人生のある部分の縮写かも知れない。しかし、これが人生だから、人生は纏っていないから、こっちも纏めないんだと云うならば、文芸は極めて

デペンデント

依属的な性質なものになつて仕舞う。自分は、文芸はも

つと独立したる、積極的な性質を持つているものだと考
える。依属的な性質を文芸が持つてはならんと云うので
はないが、一方に於て独立したる積極的の性質を持たせ
なければいけないと云うのである。芸術は単なる摸倣で
はない、創造であると思ふ。それだから、小説
に限らず、芸術的作品は、自然の造り得ざる特別なる風
趣を帯びていなければならんと思つてゐる。自然が造れ
るがままの形を、特別なる光明或は色彩の下に照らし出
すのが芸術であると思つてゐる。

一篇の小説は一箇の新らしい別世界である。現実の世界ではない。いくら自然を摸倣しようとする処で、成立した小説は自然其物ではない。自然其物を摸倣するのが目的で、しかも自然其物に達することが出来なければ、小説の存在する必要はあるまい。詮ずる所、文芸の存在する価値を有しているのは摸倣だからではない。自然に見るべからざる風趣を、作品中に現らわさんとするのが芸術の原義である。

自分は「三四郎」を芸術中の最も芸術的なるものとした。其意味は茲まで説明して来たら明らかになった。

うと思う。「三四郎」一篇は、自然に見るべからざる結合を（人間やら、人間の動ごきやら）やって、人間性情の動き方を描き出したものである。そうして、自然に見るべからざる色と光りの下に映し出だしたもののなのである。そうして写し上げ描き出だしたものが活きている。

けれども、ある特殊なるシチュエーション（自然界で見出すことの出来ないような）に置かれた人間の動き方が大変巧く動いて、活きているように見えるのは、単に其作者の技巧上の才によるんだとも云える。書き現わし方が巧まければ、どんな人間をかいても、活きているよ

うに思われる。けれども活かすと云うのが、単なる文芸の目的ではない。作中の人物が生きていなければならぬいと云う要求は、つまりは、其作全体が、第三者即ち翫賞者に対して、意義ある感化を与えなければならぬと云う根拠から出ているのである。意義ある感化と云うことは、何も文芸を道德説や宗教や哲学やを説く為めの方便又は器械としろと云うのではない。説明の為め教訓の為めに文芸があれと云うのではない。文芸の作品から、知らず知らずのうちに読者の脳裏にある感化が及んで来るように、作者の側から云えば、作品全体に、作者の人格

が泌み込んでいるような作物でなければいけないと云う意味である。此点に於て芸術は、自然界に見ることの出来ない、独特な色調を帯びて来るのである。作者の大なる人格の影響が読者に薰化を及ぼすのである。

今の文壇の作家の多くは、自家の経験でなくつちや駄目だと云つて、偽らざる自己の告白だとか号して、いつもいつも、自分の閱歴ばかりを書いている。本当は書いていないのだから知らぬが、とにかく書くんだと云つていゝる。これは小説の中に描かく人物を活かす為めには、尤も都合よき手段には違いない、人から聞いたことだの、

本で読んだことだのよりか、自家の経験を其儘筆にした方が、多くの苦心を費やさずして、人間を書き活かすことが出来るであろう。しかし当面の目的は、描いた人物が生きていると云う点にある。活きた人間を描かれさえすれば、必らずしも自家の閱歴を書いた処が、必らずしも小説中の人物が活きたとは行かない。偽らざる自己の告白と云うものは、出来上がった一箇の小説とは何等の交渉もないものであつて、当該小説をかかんとする動機に於て、倫理的意義を其作家の人格の上に認めることはあつても、或は其作家の事実上の行為に対する第三者の好

奇心はあつても、既に完成して、一箇の小さな世界を形造っている小説の価値には、——芸術として見たる小説の価値には何等の關係を有していないのである。

要するに、活かす為めの手段として、多くの作家は自分の事ばかり書いている。それだから書いたものは、或る程度まで巧く出来上がっている。しかし巧く出来上がっていると言うのは、人間が浮き上がっていると云う丈けで、其浮き上がった人間と、面接する氣になつて、見ていると実に下らない人間と、面接する氣になつて、見ていると実に下らない人間ばかりである。或る小説の主

人公は酒ばかり飲んで金に困っている。ある小説の主人公は淫売みたいな女に引つかかって夢中になっている。ある小説の主人公は女と手紙の往復をして、妻君から見付かっている。盡く下らないことをしている人間ばかりである。何も酒に酔っぱらったり、妙な女に引つかかったり、手紙をやりとりすることそれ自身が駄目だと云うのではない。どんな材料でも取り扱い方によつては、観察の仕方に依つては、読者に意義ある感化を与え得ないとも限らない。唯其小説から受ける全体の印象が、極めて平凡で極めて下等だから駄目だと云うのである。寄席

に行つて見ると松井源水が独楽こまの曲芸をやっている。よくまあ、あんなに手際よく廻わせるものだと思う。今の小説の多くを読む度に自分は、いつも源水の独楽を思い出す。ある程度まで似ていると思う。つまりは技巧丈けが身上である処を、似ていると云うのである。

自家の閱歴を書くは方便である。此方便を用うるのを批難するのではない。方便だけが巧く行つて、肝心な目的がゆるがせ忽ゆるがせにせられているからいけないと云うのである。もつと意義ある生活を写つして貰いたい。人生の根本義に触れた徹底的の作物を出して貰いたい。換言すれば、

もつと、意義ある経験をして貰いたい。或はもつと意義ある観方をして貰いたい。平凡が生む平凡の其には堪えられなくなった。文芸の事業は単なる技術の問題ではない。「三四郎」は想像の所産である事は云う迄もない。想像の所産と云うのは畢竟、自家の過去の経験を、小さな分子に解して、新らしい結合をやった結果である。だから、単独なる自家の閱歴を其儘に写つして、人物を活かすに比べれば、二重の困難がある。困難がある代わりには、摸倣でなくって創造である。創造である点に於て、作家の偉大なる力の発現を見ることが出来るのである。

そうして作家の人格的意義が成立するのである。尤も想像の所産でなくとも、特定の性格、特定の感情、気持ち其他を写つすと云う事は、其写されべき材料に対して当該作者が、興味を有している事になるのだから、延いては作者の人格を、其作品の陰に想見することが出来るのだが、想像の作物は、全部が作者の創造にかかるが故に、それだけ強く作家の個性的色彩を帯びて、読者は作者の人格を直下に会得し得るのである。

「三四郎」は意義ある感化を読者に及ぼす作品である。著者の人格を、趣味を、徹骨徹隨に体読せしむる作品で

ある。「三四郎」に出て来る人間は、盡く高等の教育を受けている人間であるが、自分が茲処で、意義ある感化を受ける作品だと云うのは、単に人間が高等教育を受けているからだと言うのではない。むしろ器械的な教育が多大の影響を及ぼし得ざる、人間それ自身の姿を、明からさまに書き現わしている処が意義ある作品だと云うのである。読者は「三四郎」に没頭して、俗界を離なれたる、清き空気を吸い得る点に於て意義があると云うのである。「如何に生くべき乎」の問題に対して、かくの如く生きざるべからずとの解答を与えている点に意義があ

ると云うのである。人間として世に住む上に於て、新たにらしき内容を、読者の胸底に、付け加えるから意義があると云うのである。新たらしき内容が同時に、有意義に生きる上に於て、必要なる新たらしき内容なるが故に、「三四郎」は価値ある作品である。（この議論の爲めには、「三四郎」の中の人間を悉く、挙げて、ここがいいとか、こう動く処がいいとか、精しく証明しなければならぬのだが、長くなるから止める。読んだ人には、自分のこの論の主旨が分かることだと思ふ）

七

「三四郎」の中に出ている人間の内で、最も興味ある性格は美禰子の性格である。最も複雑であつて、最も個性的な女である。そうして近代的の色彩を帯びている。あんな女は二十世紀でなければ、見ることの出来ぬ女である。

ツルゲニエフの「初恋」だつたと記憶する。若い女主人公（？）が、若い士官達をあつめて、自分の意志通り命令通りに若い士官が動くのを見て喜んでいる所が書い

てあった。それから「父と子」の中に出て来る何んとか云う、バザロフの向うに廻わって、バザロフと大變興味ある舌戦をやる。大變インテレクトの勝った女もある。あの女もバザロフを支配しよう、支配しようとする女であつた。

ズーデルマンは近代的の女性をかくに靈腕を有している作家である。「暮光」と題する処女作の短篇集以来、彼の小説に現われて来る重なる人物は大抵、一種の特徴ある女ばかりで、しかもそれぞれに違った性格を有しているのだから面白い、その面白い種々の性格のうちで、

最もよく出来ているのは「カツツエン・シュテツヒ」のレギーネと「エス・ヴール」のフェリチタスとである。

（近頃出来た「ダス・ホーエ・リード」と云う小説にも女が主人公として取扱つてあるそうだが、まだ読んで見ないから、何とも言えぬ）しかし二人共ある傾向を持つて動いているんだからして、巧いながらも一筋の縄で始末することの出来る性格であると思う。レギーネは野生の女（野生だと云つてもゴルギーの書いているマルヴ的の野生ではない）を、野生なるが儘に写つし出でて巧いのである。フェリチタスは所謂社交界の夫人のある特殊

性を極端に引きのばして、描き活かしたものである。複雑ではあるが、複雑なるものの動き方がある一つの方向に向かっているのだから、まだ書き易いと思う。

美禰子の動き方に至っては、遂に一筋の縄で始末の出来ない動き方である。あの女の動き方は一定の方面を指し示めていないから端倪たんげいすることが出来ないのである。三四郎に対して愛情を持っていたんだか、愛情を持っていないくって唯男の心を支配して自ら楽もうとしたんだか、或は単にああ云う働き方それ自身に興味を持っていたんだか、その何ずれかを、或はその全体を、無意識

にやっているのだから、有意識にやっているんだから、丸で分らない。読者は、同時に又三四郎に推断臆測の余地を与えずに動いている。しかも其動いている処を讀んで行くくと、美禰子は慥かに生きています。此点がズーデルマンの書いたフェリチタスや、ツルゲニエフの女やらよりも、もう一歩進んだ個性的な近代的な女性のクリエーションだと云う処である。

ある人は、此点を捕らえて、美禰子の性格に統一がないと云って批難して居った。しかしながら、性格に統一があると云う事は一方から云えば一本調子の人間を書く

と云う事である。そんな人は米の飯を喰つてゐる処から書き出せば、年百年中米の飯ばかり喰わせていなければ承知しない連中である。西洋料理を喰つたら駄目だと云うに違いない。そう人間は一本調子に行くものではない。ことは、美禰子を批難する人でも承知している事であろう。一本調子で行かぬものだと認めるならば、変幻出没の限りを盡くしている一種の性格に対して、統一がないから不可んと批難は出来ぬ筈である。統一の出来なくつても、生きて動いていれば沢山である。活かす為めの統一なら、方便として差支ないが、統一が出来んから生きていない

と云うのは問題にはならん。

美禰子は要するにあるポイントを境界線として、その境界線を超えない範囲内に於て、自由に、自在に活躍している女である。其活躍が自由なるが為めに、終に三四郎及読者に、統一する事の出来ない性格である。その統一することの出来ない性格の種々の面が、時と場所とを異にして、転々現らわれて来る。其処に読者の興味が惹き著けられるのである。

三四郎が原口さんの宅に美禰子をたずねた時より以後の美禰子は、レフレクシオンを以て動いている女になつ

ている。美禰子には既に所天が定まった。所天の定まったと云うことが美禰子の頭を支配して、今迄の自由の動き方を全然束縛してしまった。男の猛烈なる傾むき方に対して、微すかなる溜息を以て答える処は既に、今迄の自由な動き方から発したものではない。そうして黙った儘小半町も来て、不意に絵のことを話し出す。あすこの曲折の工合は実に巧みなものだと思った。女の心を支配している問題は絵でない、絵の出来上がり様の早さやなんかではない。三四郎の猛烈なる動き方に対する、自分の言動に対する責任の感である。不意に絵を持ち出すの

は、三四郎に対する意識的の慰藉の言葉である。以前の
ような、自由な動き方から発したものではない。

次で教会の前で三四郎から金を貰った時に、かすかに
「我は我が咎とがを知る」と云ったのも、過去の自在なる活
動に対する責任を痛切に感じたからである。

前半に自由なる世を描き、後半に、自由なるを得ざる
に至った女を描がいて、しかも三四郎及び読者に猶解き
難き謎を残こす処は、手際よく行っていて面白いと思う。

女の性格に、ある境界線までの自由を与えている点に
於て、又面白い結果が出て来ている。この境界線を超え

て自由に挙動ふるまうときは、一種の西洋臭い、大変濃厚なものが出来たに違いない。ある点に於て「カツツエン・シユテツヒ」のようなものが出来たに違いない。三四郎の方では、初めにある制限を受けて居ながら段々と女の方に近づいて行く。女は不即不離に動いて、常に三四郎とある間隔を保っている。此間隔が常に二人の間にわだかま蟠つていることが、言葉を換えて言えば二人が喰い付きそうである。その時は女は、女の踏み得べき境界の線上に立っている。此時一步男が強く働らき掛ければ、結果はど

うなるか分らない。男の方で又、前よりも、より大なる角度を以て女の方に進んで行く、すると女は其瞬間にはもう境界線を退ぞいでいる。波の起伏する形に二人の關係がなっていて、しかも遂に合体しない処が、興味ある造り方だと云うのである。

バウル・バイゼと云うドイツで有名な短篇作家がある。其短篇のうちに「トレツピの女」と云うのがある。アルプスの峠茶屋のような処に舞台をとってあったように記憶しているが、其茶屋の女に、七年前契つた男とが再会する処から初まって、男は昔の事は忘れて国で女房

を持つているのを、茶屋の女は、捻よりを元に戻そうとする処が書いてある。初めは男が逃げる、女が追っかける。いくら云つても駄目だから、女は諦める。諦めると今度は男の方から追っかける、女が逃げる。そうこうしているうちに二人の仲が七年の昔に還ると云う筋である。茶屋と茶屋の近処だけで行われることで、大分うまく行っていると思っていたが、女が何んだかお仕舞になると魔婦のような気がして不愉快だった。ズーデルマンの「エス・ブール」でも女が男を追っかける。男は逃げる。逃げてでも仕舞にはつらまるが、捕らまった跡で、男が女か

ら逃げられる処が書いてある。此二つは何ずれにしても、逃げたり追っかけたりするものの、過去の歴史が逃げるものを支配しているから、遂にはつらまって仕舞うのである。「トレツピの女」は非平凡な過去を持った人間二人が、非平凡な場所で（すべての社会から離れているから）非平凡（二人が喰つつく事）な事をしようとするから、其事は行われ易い。「エス・ブール」の方でも、非平凡な過去を持った二人が、しかも非平凡な女と、平凡な男（平凡じゃないかも知れぬが、相手が親友の妻君だからして、自由に動くことを拘束されている人）とが、

非平凡な事をするのだから、これも比較的やさしいだろうと思う。「カツツエン・シユテツヒ」でも非平凡な境遇に二人が置かれているのだから（其非平凡な境遇を作り得た処がズーデルマンの手柄ではあるが）二人が喰つつくのは比較的訳けもなく出来る事だろうかと思われ。つまりは、此れ等の小説は、篇中の人物の過去か、境遇か、性格か、何ずれかを非平凡にしているから、非平凡なことをさせた処で無理らしくなく容易に行われ得るのである。平凡な人も、平凡な境地に置いて、非平凡なことをさせるが、むつかしかろう。

「三四郎」は非平凡な二人を配合している。三四郎は非平凡だと云うことは出来ぬかも知れぬが、美禰子に囚らわれている点に於て、美禰子に風馬牛たる能わざるが故に、非平凡だと云つてもいいだろう。此二人が非平凡な事（即ち尋常一様の交際たるに止まらずして、想恋すると云う事）をやるのは、境遇や場面が平凡であつても、そんなに困難なことではあるまい。——それを喰つ付けずに、ある程度の関係に止めてあるのを、興味あることだと云うのである。そのために美禰子の動き方も、ある境界線までで止めてあるのを面白いと云うのである。

八

前に述べたような、ある程度の関係で止めてあると云う点に於て、力の発現を極度に顧わさずに、爆発せんとする少こし手前まで書いて、しかも其力の強さを、陰に潜ましめた点に於て、奥行ある感じを与える点に於て、要言すれば徒らに激越の調を帯びざる点に於て、自分は此「三四郎」をクラシック趣味の小説だと云いたい。中に出て来る人物が端然たる儀容の下に、動いているから

である。熱がないのではない、熱に上皮が着せてあると云うのである。上皮と云った所で、心に甲を欲して口に乙を称える、偽の面の謂ではない。

静平の紗が一面にかかっていると云うのである。単に性格の動き方だの、それにつれて起る事件だのがクラシック趣味だと云うのではない、描写の筆も亦、すべてを描き盡さずして、すべて以上を語る点に於て、クラシック趣味を帯びている。広田先生の引越しの手伝いで、三四郎と美禰子とが、暗い二階に上がって行く処がある。あすこの一場は大変面白いと思うのだが、そのうちに、

こんな処がある。「三四郎はだまっつて、美禰子の方へ近寄った。もう少し、美禰子の手ばけつに自分の手が触れる所で、馬尻ばけつに蹴爪づく」と云う処が全篇の調子であつて、それがクラシック趣味だと名づける処である。

けれども一方から観ると、美禰子のような、与次郎のような、或は広田先生のような、其他色々の性格を、その性格の動くが儘に写つしてあるのだから、三四郎の性格の序を追うて、傾むいて行く処などを描いてあるのだから、ツルゲニエフやフローベルやを自然派だと云う意味に於て、自然派の小説と云えないこともない。

もう一遍立場をかえて見ると、此小説は浪漫的な小説だとも云える。ああ云う女や、ああ云う男は此自然界には見ることが出来ない。ああ云う結合の仕方も、其儘では、自然界に見ることが出来ない。自然界に見ることが出来ない性格や、自然界に見ることが出来ないシチュエーションを造って、色々に動かしている。つまり、自然に其儘あり得がたきものをクリエートしている点で、浪漫的と云うのである。同時に描写が又、多く浪漫的の分子を含んでいる、気持又は感情を含めたる描写が多い。

最後に、すべての人物が、盡く意義ある性格を有して

いるが故に、芸術をして意義あるものばかりではない、人間として、世に生きる上に於て意義あり価値ある性格をかいているのだからして、一種の理想派的の小説とも云えると思う。

要するに「三四郎」一篇は、単なる一角から見た丈では、狭き一主義の管から覗いた丈けでは、充分なる翫賞は出来ない。一角から批評しようとしたら、象のからだを、盲目が探ぐって、何んだかんだと云うと同じ結果が出て来る。所詮は、色々のサイドから見て、色々に論じて行かなければ、本当な評価は出来ない。

之より自分は、こんな小説を完全に評価し得る資格を具えていると云う自信を持って居らん。従つて此一篇の論文は、此小説の単なる一端を挙げて、論じたに過ぎないんだと考えている。

(明治四二・七―八「新小説」)

日本文学電子図書館

「三四郎」を読む

著 者 小宮豊隆

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第 6 卷」角川書店

昭和42年7月30日 5版発行

日本文学電子図書館